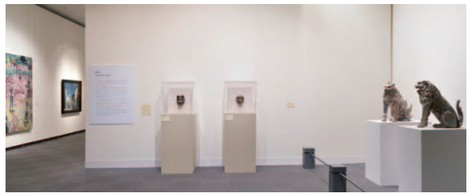
レポート REPORT 01

開館20周年記念 愛知・岐阜・三重 三県立美術館協同企画

魔術／美術 ―幻視の技術と内なる異界―

2012年4月13日［金］―6月24日［日］
愛知県美術館［愛知芸術文化センター10階］



「魔術／美術 ―幻視の技術と内なる異界―」展 会場風景

愛知県美術館で、芸術の持つ魔術的側面に焦点をあてた「魔術／美術 ―幻視の技術と内なる異界―」展が開催された。だまし絵や遠近法など人間の知覚を操作する作品を取り扱った第１章、幻想的イメージの作品を集めた第２章、世の中の常識的感覚を覆す現代作家の作品を取りあげた第３章から成り、本学の関係としては愛知県美術館の収蔵作品から、第１章に坂本夏子、第３章に吉本作次と筆者の作品が展示されていた。入場して最初の空間には20世紀ダリの油彩画と、室町時代の能面、現代の作家野村仁のガラスのオブジェが並ぶ。絵画・版画・写真・立体・映像・インスタレーションの作品とともに、紀元前のメソポタミアの円筒印章・日本の狛犬などが混在する、時代・地域・ジャンルを越えての展示は刺激的であり、また装飾性の高いポスターやチケット等の刷り物、読み物としても独立性を持たせたカタログ、一部民族博物館的展示法の採用など、いろいろと今後の美術館のあり方に一石を投じる展覧会だった。

印象深かった作品は、江戸時代の狂言面で、狸と鳶の面の周囲に漂う名も無き匠の繊細で研ぎ澄まされた感覚・確かな技術・気高い精神に、日頃怠惰になりがちな生活を一蹴される。木村定三コレクションの懐の深さに感謝。

中澤英明　美術学部教授

予告 FUTURE EVENT 01 素材展

2012年7月27日［金］―8月8日［水］
名古屋芸術大学アート&デザインセンター

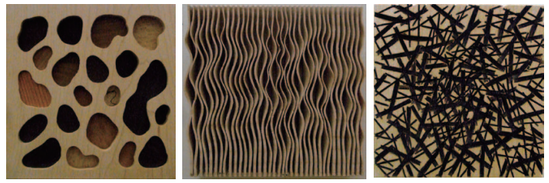
デザイン学部クラフトブロックのメタル＆ジュエリーデザインとテキスタイルデザイン2～4年生による前期授業作品展です。期間中展示替えを行い、様々な素材を活かした作品をご紹介します。
前期：2～3年生 7月27日－8月1日
後期：4年生、大学院生、研究生 8月3日－8月8日

昨年度の展示風景

FUTURE EVENT 02 『ノリ・モリモト』展

2012年10月12日［金］―10月17日［水］
名古屋芸術大学アート&デザインセンター

照明デザイナーとしても知られるノリ・モリモト氏（今年度美術学部特別客員教授）は、自然に逆らわず、洗練された職人技でレリーフ作品を制作し続ける孤高のアーティストです。モリモト氏がアトリエを構えるバーモントの樹木を素材とした約50点のレリーフ作品とファニチャーをお楽しみください。



レリーフシリーズ小（2010）

編集後記

梅雨も明け、ついに夏本番です。この時期になると、子供の頃のワクワク感がよみがえり旅の予定など立てたくなります。今夏も各地で気になる展覧会やアートイベントなどが開催されますが、アートは「人と場所」、「人と人」とを繋ぐきっかけともなります。そんな出会いを求めて旅計画を立ててみてはいかがでしょうか。

１年半にわたり当センタースタッフとして、多くの作家やその卵たち、彼らをサポートする人々に支えられてまいりましたが、この度、私も旅立ちます。本誌作成にあたりご協力いただいた皆様に、この場を借りて心から感謝を申し上げます。

猪狩香織（アート＆デザインセンター）

2012 7-10 EXHIBITION SCHEDULE

Open 12:15―18:00（最終日は17:00まで）日曜・祝日休館　**入場無料**　どなたでもご覧いただけます。
スケジュールは変更になる場合がありますので、ご確認ください。

7/27 金 → 8/ 8 水	素材展	
8/ 9 木 → 9/20 木	夏期休館	
9/21 金 → 9/26 水	立体造形コース前期制作展	
9/28 金 → 10/ 3 水	彫塑コース作品展	
9/28 金 → 10/ 3 水	雨の日を楽しくするデザイン	
9/28 金 → 10/ 3 水	有田文庫―ひらめきを紡ぎだす書物たち―	
10/ 5 金 → 10/10 水	ア”ーッ!ラジオ&大学院同時代表現研究 展	
10/12 金 → 10/17 水	『ノリ・モリモト』展	
10/19 金 → 10/24 水	『遭遇するドローイング;ハノーファー&名古屋2012』展	
10/26 金 → 10/31 水	大学院洋画制作2012	

最寄りの交通機関をご利用の場合
名鉄犬山線（地下鉄鶴舞線乗り入れ）徳重・名古屋芸大駅下車西へ約1,000m徒歩15分
※急行一準急電車の場合は西春駅で普通電車に乗り換えるか下車してください
中部国際空港からも名鉄犬山線をご利用ください
西春駅から北西約2,200m徒歩25分、西春駅からはタクシーの便もあります
自動車をご利用の場合
名神一宮インターから10分、名神小牧インターから15分

大学基準協会認定マーク
本学は2011年4月に、大学基準協会の大学基準に適合と認定され、認定評価を再取得しました。
認定期間は、2011年4月から2018年3月までです。
これにより、法令化されている「第三者による認定評価」にも合格したことになります。

名古屋芸術大学 Art & Design Center
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　TEL［0568］24-0325　FAX［0568］24-2897

Ble Vol.34
発行日　2012年7月31日
編集　髙橋綾子（美術学部美術文化コース）／猪狩香織（アート＆デザインセンター）
発行　名古屋芸術大学アート＆デザインセンター
〒481-8535 愛知県北名古屋市徳重西沼65番地　E-mail adc@nua.ac.jp　URL http://www.nua.ac.jp

2012　Printed in Japan ©　Art & Design Center, Nagoya University of Arts

デザイン／印刷　サンメッセ株式会社

NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS
Ble!
NAGOYA UNIVERSITY OF ARTS　ART & DESIGN CENTER　NEWS　2012.Vol.34

トラベル Travel

アーティストは旅をする。そして、アートを求めて鑑賞者もまた旅をする。
そしてさらには、“旅をする”アートもあるのだ。
42―43年もの歳月を超えて、ある「行為（アクション）」は再生し、つながり、旅をした。

1969.7.20

京都・宇治川→大阪・淀川・中之島

現代美術の流れ（1969年）　写真提供：池水慶一

2011.6.6

中之島・堂島川（大阪）

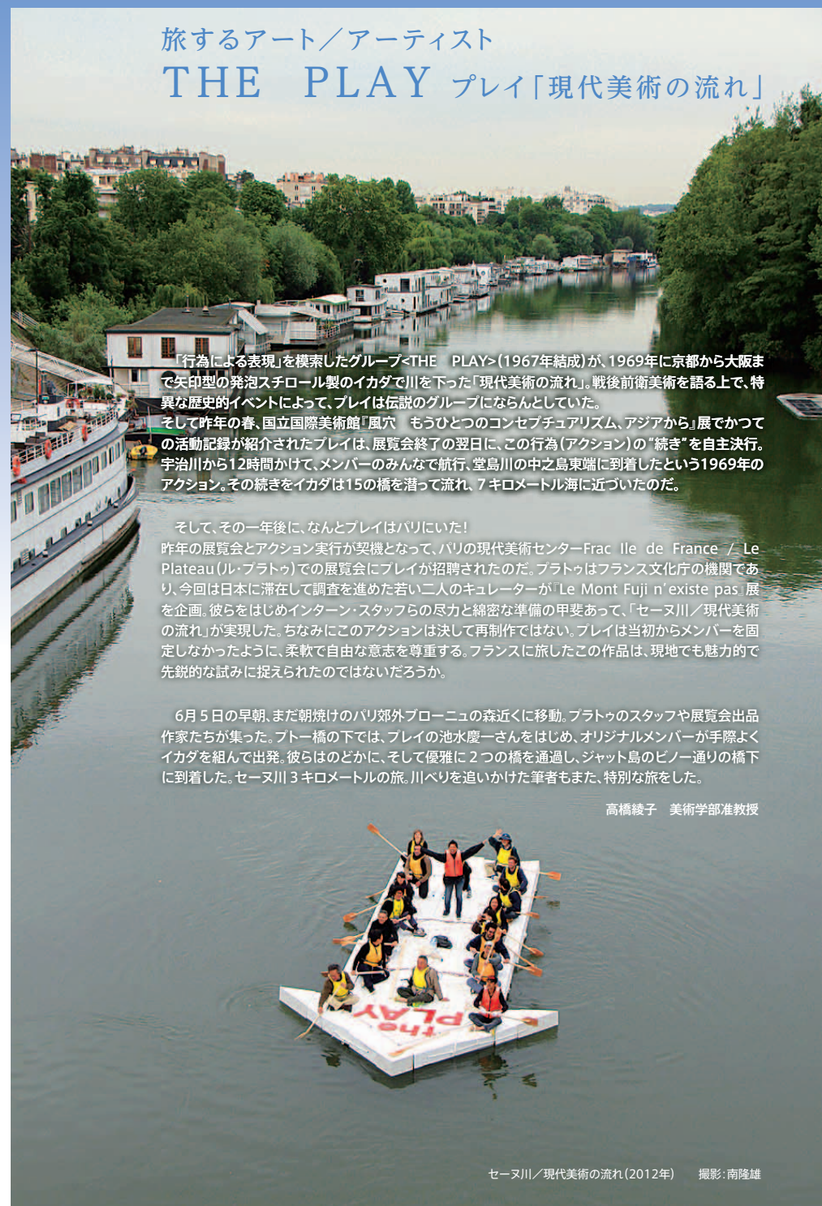
ナカノシマ　現代美術の流れ（2011年）

2012.6.5

セーヌ川（パリ）

Le Plateauでの「Le Mont Fuji n'existe pas」展
（2012年6月6日～7月29日）
エロディー・ロワイエ ＆ ヨアン・グルメルによる企画。彼らが日本滞在中に、富士山を見ることが叶わなかったことからひいて、イメージと実在を問う「富士山は存在しなかった」というタイトルをつけた。
プレイの他に、島袋道浩や木村友紀、さらにはハミッシュ・フルトンの作品なども出品された。

旅するアート／アーティスト THE PLAY プレイ「現代美術の流れ」



「行為による表現」を模索したグループ<THE PLAY>（1967年結成）が、1969年に京都から大阪まで矢印型の発泡スチロール製のイカダで川を下った「現代美術の流れ」。戦後前衛美術を語る上で、特異な歴史的イベントによって、プレイは伝説のグループにならんとしていた。
そして昨年の春、国立国際美術館『風穴　もうひとつのコンセプチュアリズム、アジアから』展でかつての活動記録が紹介されたプレイは、展覧会終了の翌日に、この行為（アクション）の“続き”を自主決行。宇治川から12時間かけて、メンバーのみんなで航行、堂島川の中之島東端に到着したという1969年のアクション。その続きをイカダは15の橋を潜って流れ、７キロメートル海に近づいたのだ。

そして、その一年後に、なんとプレイはパリにいた！
昨年の展覧会とアクション実行が契機となって、パリの現代美術センターFrac Ile de France / Le Plateau（ル・プラトゥ）での展覧会にプレイが招聘されたのだ。プラトゥはフランス文化庁の機関であり、今回は日本に滞在して調査を進めた若い二人のキュレーターが「Le Mont Fuji n'existe pas」展を企画。彼らをはじめインターン・スタッフらの尽力と綿密な準備の甲斐あって、「セーヌ川／現代美術の流れ」が実現した。ちなみにこのアクションは決して再制作ではない。プレイは当初からメンバーを固定しなかったように、柔軟で自由な意志を尊重する。フランスに旅したこの作品は、現地でも魅力的で先鋭的な試みに捉えられたのではないだろうか。

6月５日の早朝、まだ朝焼けのパリ郊外ブローニュの森近くに移動。プラトゥのスタッフや展覧会出品作家たちが集った。プトー橋の下では、プレイの池水慶一さんをはじめ、オリジナルメンバーが手際よくイカダを組んで出発。彼らはのどかに、そして優雅に２つの橋を通過し、ジャット島のビノー通りの橋下に到着した。セーヌ川３キロメートルの旅。川べりを追いかけた筆者もまた、特別な旅をした。

高橋綾子　美術学部准教授

セーヌ川／現代美術の流れ（2012年）　撮影：南隆雄

トラベル Travel

旅する美術家

人生は旅である。
そして、美術家の人生は、いくつかの旅に彩られる。
そんな視点から、五人の美術家を取り上げ、旅の地とゆかりのある作品を解説しましょう。

※本テキストは、美術学部美術文化コースの授業「芸術編集研究」の学生と教員が担当しました。

東松照明（1930—）　宮古島（沖縄県）

懐かしい日本に出会う

昨春、名古屋市美術館で「写真家・東松照明全仕事」展が開催された。名古屋市出身の東松照明は、戦後日本を代表する写真家である。20歳で写真と出会い、岩波写真文庫のスタッフ・カメラマンとして活躍した後は、長崎、沖縄に重点を置きながら各地へと赴く。取材に応じて現地へ「異邦人」として移り住む東松は、記録者としての側面を持つ一方、旅する芸術家であると言っても過言ではない。彼の活動の根源となるのは、戦後日本のアイデンティティである。東松は「昔ながらの沖縄の風景や生活習慣のなかに、私自身も忘れ去った、だけど私のなかに抜きがたく沈殿している懐かしい日本に、沖縄で出会った」と言う。彼の作品は、被写体が孕む美しさを提示するだけに留まらず、その背景に隠された文化や社会の、一瞬一瞬の息づかいを鑑賞者に伝える。私たちは《宮古島》に、日本人の回帰すべき場所を見出すことができる。写真家とは単なる記録者ではなく、見る者をタイムトラベルさせる魔術師なのかもしれない。（木村遊）

《宮古島》1979年　作家蔵

《埃及所見》1931年　山種美術館蔵

速水御舟（1894—1935）　エジプト

生活と悠久の歴史

40歳の若さで早世した近代日本画家・速水御舟は、亡くなる5年前に欧州やエジプトを巡り、9ヶ月間の美術研究と写生に励んだ。エジプトに滞在したのは10日間ほどだったが、その間に広大な土地の情景や風俗を鮮明に描く機会を得て、新たな画風を見出した。エジプトでの御舟は、悩殺的に降り注ぐ灼熱の太陽が昇る前の朝方に行動し、日中は午睡をして、涼風が吹き始める夕方から再び見物をしていたという。実際のエジプト人も、真夏の時期は日中に眠り、夜から朝にかけて活動する人が多い。この旅の集大成とも言える《埃及風俗図巻》は、8枚の作品を繋げた絵巻であり、太陽から始まり月で終わる画面構成となっている。登場人物たちのターバンの巻き方や布の羽織り方に違いをもたせることで、一日の気温の変化を描写している。エジプト人と同じ生活をした御舟だからこその表現だ。《京の舞妓》以来、人物画から遠ざかっていた御舟であるが、この作品においてエジプト人の生活の移ろいと、さらには悠久の歴史をも表すことに成功したと言える。（中山史帆）

※山種美術館「夏休み企画　美術館で旅行!—東海道からパリまで—」(7/28～9/23)では、旅をテーマに本作が展示されます。

《長岡の花火》1950年　個人蔵

山下 清（1922—1971）　長岡（新潟県）

放浪の旅と花火大会

山下清と言えば、ドラマ「裸の大将放浪記」。旅先で絵を描き、お世話になった人々に絵を残していく感動ストーリーを思い浮かべる人も多いだろう。しかし、実は現地で絵を描くことはほとんどなかったという。なぜなら彼は、サヴァン症候群であったと言われており、驚異的な記憶力を持っていた。長い旅から帰還して、家や八幡学園で脳裏に焼き付いたイメージを鮮明に再現した。気ままに放浪していた清であったが、花火大会があると聞くと、各地に足を運んでいる。そして、感動した情景を得意の記憶力でそのまま作品に残している。有名な《長岡の花火》は、清が得意とする貼り絵の作品である。花火の大音量が聞こえてきそうな臨場感、祭りに集う人々の楽しそうな雰囲気が伝わり、まるで清と一緒に花火を見ているような心地になる。全体を見渡すように描かれた構図からは、清の花火に対する純粋な気持ちが感じられる。（福井彩音）

ポール・ゴーギャン（1848—1903）　タヒチ（フランス領）

楽園への憧れと失望

ゴーギャンとタヒチの関係は深い。彼は画家として活躍したわずか20年のうち、約半分をタヒチで過ごしている。文明からの解放を望み、楽園を求めて各地を転々としたゴーギャンは、ついにタヒチの奥地で理想に近い環境（楽園）を手に入れる。しかし、そこでも孤独を味わった彼は「野蛮人への憧れ」と「文明人の宿命」との間で苦しむこととなった。《かぐわしき大地》に描かれた女性には、楽園の象徴である旧約聖書のイヴの姿が重ねられており、文明を手にしたことで訪れる失楽園が暗示されている。女性の鮮やかな黄色い肌や飛行するトカゲの赤い羽根は、楽園に実る熟れた果実を連想させるだろう。さらに木々の濃い緑は、対比的な色彩で楽園の地に影を落としている。ゴーギャンの楽園への憧れと失望が交錯するこの作品には、居場所を求める彼の心がその色彩に表れているのだ。それは、現代という窮屈な時代を生きる私たちの心にも呼応し、震えるような感動をもたらす。この絵はゴーギャンの人生そのものである。（村石桃子）

《かぐわしき大地(Te Nave Nave Fenua)》1892年　大原美術館蔵

アンリ・マティス（1869—1954）　ヴァンス（フランス）

創造と人生の到達点

“色彩の巨匠”20世紀を代表する画家マティスは、北フランスのノール県に生まれた。法律家を志していた彼が絵画に目覚めたのは20歳の頃。意を決してパリに出て、モローなどの下で美術を学び、やがて強烈な色彩と筆致によるフォーヴ（野獣派）のスタイルを生み出す。やがて南仏ニースに活動拠点を移すと、穏やかな雰囲気の室内画を描き、さらに体力の衰えた晩年には“色彩でデッサンする”切り紙絵の世界に到る。そのマティスが最晩年の4年をかけて内部装飾に携わったのがロザリオ礼拝堂である。ニースから20km、バスで1時間ほどの街ヴァンス。蒼い屋根の白亜の建物は、厳かというよりは、清新な愛らしさと優しさに満ちている。内部壁の白タイルには「聖母子」がシンプルな黒い線で描かれ、卓上には金の十字架の造形、そしてステンドグラス「生命の木」には光が注ぐ。「思考が明晰になり軽やかな気持ちになること」を目指したマティス。光と空間の単純化と純粋化を真摯に追求した作家の、全生涯の到達点がここにはある。（高橋綾子）

《ロザリオ礼拝堂(CHAPELLE DU ROSAIRE)》1951年
撮影:高橋綾子 2012年

REVIEW

2012年度アート＆デザインセンター企画展

BITE-SIZE 日英テキスタイルアート交流展

2012年5月11日［木］－5月23日［水］

BITE-SIZE展会場風景

2012年5月11日から23日、A＆Dセンターの今年度の企画展「BITE-SIZE　日英テキスタイルアート交流展」が開催されました。

テキスタイルアートは1970年代に欧米で確立した領域で、繊維素材の持つ造形の可能性と向き合い表現の幅を広げてきました。日本では、自国の伝統的な染織文化をバックグラウンドにして、国際展を舞台に優秀な作家を輩出し、一方イギリスでは、コンテンポラリーアートが盛んでありながら、今でも生活に手芸が根付いている背景から、独自の発展を遂げてきました。

本展は、日英を代表するテキスタイルアーティスト51名による25cm四方のミニアチュール作品展です。昨年ロンドン（大和ジャパンハウス）で開催され、その後京都（ギャラリーギャラリー）へ巡回、本学での開催が最終地でした。

企画者は本学の姉妹提携校である英国クリエイティヴアーツ大学のレスリー・ミラー教授で、彼女は15年に渡り日本とイギリスのテキスタイルアートの交流をテーマとした展覧会を継続的に企画してきました。

作品は素材感を重視したもの、技法に優れたもの、コンセプチュアルなもの、装飾的なもの、カラフルなもの、ユーモラスなものなど、テキスタイルアートの多様性を感じさせるものでした。

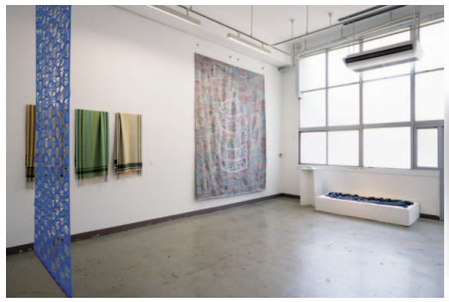
同時開催として、本学とクリエイティヴアーツ大学両校のテキスタイルデザインコースの学生による交流展、NUA×UCAが行われました。本学から3名、クリエイティヴアーツ大学から2名の学生の作品を展示、それぞれのテキスタイル教育の違いを感じさせる展覧会となりました。

会期中の12日には、ミラー教授による特別講義、ミラー教授とギャラリーギャラリー　ディレクターの川嶋啓子氏との対談を開催、当日は本学の学生、教職員に加え、イギリス、東京、京都から出品作家が聴講されました。

本展により、東海地域であまり知られていないテキスタイルアートを広く紹介出来たことは、大変有意義だったと思います。

扇　千花　デザイン学部准教授

レスリー・ミラー教授



学生交流展会場風景

Michael Brennand-Wood氏の刺繍作品

島田清徳氏の布作品

ART WORDS FROM THE ART WORLD

BankART1929 代表
池田　修
Osamu　IKEDA

芸術一話 第10話 都市に棲む

「何をつくるか」ではなく、「どこにつくるか」が重要である、とあるアーティストは語った。作品が成功するかどうかは、80％その場所に出会った段階で決まっている、と。これはインスタレーション作家の場所決めの論理からでてきた言葉として留めるべきではない。どの画廊、どこの美術館で、あるいはどういう文脈の展覧会に出品するのかといった、ごく一般的な作品発表のプロセスにもあてはまる言葉だからだ。

「都市に棲む」とはどういう意味なのか？なぜ、都市に「住む」ではなくて、都市に「棲む」なのか？元始、人間は動物として存在した。動物であるからには、眠る場所も、食べることも、自ら行動し、探し求め、獲得してきたはずだ。居心地のよい場所はどこか？水のおいしいところ、食べ物があるところ、そして風がふくところは？私達の祖先は、恐らくそうやって場所をみつけ、生き続けてきたのだと思う。はたして現代の私達はどうか？人類は数万年に及ぶ文化的と呼ばれる活動を通して、確かに様々な道具を創り、知識を身につけ、文明を築き上げてきたが、その反面、動物として本来もっていた運動神経や反射神経を失い、いつのまにか都市の中で「住まわされている」存在になってしまったのでないか？3.11を経験した私たちは今こそ、野生の思考を取り戻し、「都市に棲む」ことを実践していきたいと思う。